文部省檢定濟

改訂實用日本文典

明治書院編輯部編

東京　株式會社明治書院

37559
Me9
資料室

42583
教科書文庫
4
815
51-198
20000
41361

教科書文庫
4
815
51-1918
2000041361

大正七年十二月六日
文部省檢定濟
師範學校・中學校・高等女學校國語科用

明治書院編輯部編

改訂實用日本文典

東京 株式會社 明治書院

広島大学図書
2000041361

3259
He9
資料室

大正七年十二月六日

文部省檢定濟

師範學校・中學校・高等女學校國語科用

明治書院編輯部編

改訂

實用日本文典

東京　株式會社　明治書院

広島大学図書
2000041361

廣島大學圖書之印

廣島大學 教 41361 図書

例言

一、本書は、僅少の時間に日本文法の大綱を教授せられむとする中等諸學校の教科用書に充てむとして編纂せるものなり。故に、專ら平易適切を主とし、徒に理論に流れしめず、生徒をして容易に我が國文法の一般的智識を會得せしめ、讀書に、作文に、直に之を實際に應用し易からしむることに勉めたり。

一、本書に用ひたる文法上の術語・分類等は、勉めて從來慣用せらるる所に從ひて、敢へて私見を加へず。蓋し、教科書に著者の創見を說くが如きは、生徒をして徒に據る所に迷はしむるのみならず、教授上にも害ありて益なしと信ずればなり。

一、本書中、特に意を用ひて編纂したる所、左の如し。

一　品詞の區別を說く前に、單語の構造を述べて一語一語の成立を明確に知らしめ、而して後、その品詞の分類に及びたること。

二　動詞の活用形を諳記せしむるに、最も簡單にして、而も、極めて容易なる方法を講じたること。

三　文語の活用と口語の活用とを同時に敎ふるは、却て生徒の記憶を混亂せしむる恐あれば、文語の活用を大體授けたる後に於て口語を說明し、以てその異同を知らしめたること。

四　助動詞、助詞の意義、用法等は讀本敎授の際說明するも可なれど、なほ文法を授くるに當りて詳說する方、却て生徒の智識を明確ならしむべしと信じたれば、勉めてこれが說明に意を用ひたること。

五　今文にては殆ど用ひられざる中古の語法も、讀本中に散見するものは一應敎授するの必要あるべしと信じ、特に「中古の助動詞、助詞の一章」を設けたること。

六　本書を學ぶものの注意、若しくは參照すべき事項を、特に上欄に注記したること。

一、所々に挿入せる練習問題は、成るべく生徒の學力に相應せる適切の例を採り、以てその學べる所の文法上の諸法則を反覆練習するに便ならしめたり。但し、之が取捨應用は一に敎授者の方寸に俟つものなり。

一、本書中には、一切假名遣法を說かず。されば、若し假名遣法の一般をも併せて敎授せられむには、本編輯部にて別に編する所の「改訂假名遣敎科書」を併用せられむことを望む。

大正七年八月

明治書院編輯部識

改訂實用日本文典

目次

單語篇

第一章　單語……一
第二章　名詞……五
第三章　代名詞……九
第四章　動詞……一二
第五章　形容詞……一五
第六章　體言　用言……一九
第七章　助動詞……二三
第八章　助詞……二三

第九章　副詞……三八
第十章　接續詞……四三
第十一章　感動詞……四六
第十二章　動詞の語形……四七
第十三章　動詞の活用……五三
第十四章　形容詞の活用、及びその語形……六九
第十五章　助動詞の活用、及びその語形……七三
第十六章　注意すべき助動詞・助詞の用法……七七
第十七章　中古の助動詞・助詞……八三
第十八章　文語　口語……八六
第十九章　口語の動詞の活用附、動詞の音便……八七
第二十章　口語の形容詞の活用附、形容詞の音便……九一

第二十一章　口語の助動詞の活用……九四
第二十二章　口語の助詞……九八

文章篇

第一章　主語　客語　述語……一〇二
第二章　修飾語……一〇七
第三章　主部・客部・述部・文主部……一一
第四章　主語・客語・述語・修飾語の倒置、及びその省略……一一三
第五章　句……一一八
第六章　文章の構造上の種類……一二三
第七章　文章の性質上の種類……一三〇

（終）

五十音圖

		ア行	カ行	サ行	タ行	ナ行	ハ行	マ行	ヤ行	ラ行	ワ行
ア段	片假名	ア	カ	サ	タ	ナ	ハ	マ	ヤ	ラ	ワ
イ段	片假名	イ	キ	シ	チ	ニ	ヒ	ミ	イ	リ	井
ウ段	片假名	ウ	ク	ス	ツ	ヌ	フ	ム	ユ	ル	ウ
エ段	片假名	エ	ケ	セ	テ	ネ	ヘ	メ	エ	レ	エ
オ段	片假名	オ	コ	ソ	ト	ノ	ホ	モ	ヨ	ロ	ヲ
あ段	平假名	あ	か	さ	た	な	は	ま	や	ら	わ
い段	平假名	い	き	し	ち	に	ひ	み	い	り	ゐ
う段	平假名	う	く	す	つ	ぬ	ふ	む	ゆ	る	う
え段	平假名	え	け	せ	て	ね	へ	め	え	れ	ゑ
お段	平假名	お	こ	そ	と	の	ほ	も	よ	ろ	を

廣島大學圖書之印

改訂 實用日本文典

單語篇

第一章 單語

○「雀」「森」「啼く」「暗し」などの如く、或意味を表す一つ一つの語を單語といふ。

○一 清き水谷間を流る

二 櫻は日本の名花なり

右の例の一は五の單語より成り、二は六の單語より成る。

○而して、これ等の例の如く、單語を連ねてまとまりたる思想を表したるものを**文章**といふ。

文章は單に文ともいふ。

○一の單語も、よく〳〵その構造を吟味する時は、數單語の合して成れるもの少からず。

石橋　渡船　郵便函　乳母車　生命保險會社

心細し　見苦し　物語る　近寄る　落し入る

右の如く、數單語の合して一單語となれるものを**熟語**といふ。

○數單語の合して熟語となる時は、その語の音に變化を生ずること少からず。

はなぞの（花園）　たかやぶ（竹藪）　たらひ（手洗ひ）

ふばこ（文箱）　しらが（白髮）　やうか（八日）

○熟語の中には、同一の語の重りて成れるものあり。

山山　人人　時時　要所要所　五分五分

追ひ追ひ　增す增す

右の如く、同一語の重疊せる熟語を、特に**疊語**といふ。

○又、熟語の中には、一單語の頭、又は尾に、獨立しては表れぬ助語の添はりて成れるものあり。

お手　み國　さ迷ふ　た靡く　た易し　ひが目

もろ人　さし迫る　ほの見ゆ　いち早し

暑さ　深み　我ら　友どち　黃ばむ　高ぶる

烟たし　男らし　路すがら　見がてら

右の如く、一單語の頭、又は尾に接して熟語を成せども、獨

立しては表れぬ助語を**接頭語・接尾語**といふ。

接頭語・接尾語は冠辭・尾辭ともいふ。

◎左の文章中より熟語と疊語とを摘出せよ。

一　高く茂りたる木々空を蔽ひて、日中も薄暗し。

二　家々みな國旗を掲げて、祝意を表す。

三　丸木橋を渡りて、雜木林の中に入れば、藪鶯の聲きこゆ。

四　だん〳〵遠ざかるに隨ひて、帆影は遂に烟霞の中に沒しぬ。

五　よち〳〵と這ひ出し、夜中にたゞ一人、溫かなる母親の乳房を慕ひて、頻りに啼き廻る。

◎左の文章中より接頭語と接尾語とを摘出せよ。

一　さ夜更けて、ほの暗き燈の影ものさびし。

二　厚みはあれども、重さは却て輕げなり。

三　おほ君のおん爲には、捨つる命も惜しからず。

四　吾らの友だちに、井上といふ姓の人三人ほどあり。

五　人々うち喜びて、小高き岡に上りて、もろ手を擧げて萬歳を叫ぶ。

○單語をその意味により、或は、その形によりて、左の九の種類に分つ。之を九の**品詞**といふ。

名詞　代名詞　動詞　形容詞　助動詞　助詞
副詞　接續詞　感動詞

第二章　名詞

○一　「子供が花を折る」の「子供」「花」などは、物の名を表す語なり。

二　「勉强は幸福を生む」の「勉强」「幸福」などは事の名を表す語なり。

右の如く、事物の名稱として用ひらるゝ語を**名詞**といふ。

○名詞の中には、事物の數量、又は、順序などを表す名稱として用ひらるゝものあり。

百　千　三年　十人　五十番　八百里

第壹號　幾百圓　數十輛

右の如く、數量、順序などを表す名詞を、別に**數詞**ともいふ。

◎左の文章中より名詞を摘出せよ。

一　兵役と納稅とは國民の義務なり。

二　親の恩は山よりも高く、海よりも深し。

三　日本海の海岸より太平洋の波打際までは五十里を出でず。

四　佐々木高綱は、賴朝公より生唼といふ名馬を賜はりぬ。

五　一番目の弟は十歳にして、二番目の弟は五歳なり。

六　五百金を投じて、乳牛一頭を購ひし田舍人あり。

七　勉强は幸福の母にして、怠惰は立身の敵なり。

○名詞は熟語より成るもの、殊に多し。

山山　人人　山鳥　針鼠　日暮れ　夕映え

落ち穗　嬉し涙　み心　おほ君　親たち

殿がた

○漢語の熟字も、また、熟語の名詞と見なすべきものなり。

修養　立志　無慈悲　不思議　傍若無人

○又、二の名詞が「の」「が」「つ」等の語にて連ねられたるものも、一の熟語の名詞と見なすべきものなり。

源の義經　鬼界が島　天つ少女

◎左の文章中の名詞を摘出せよ。

一　叔父君は娘ども數多あれど、男の子は一人もなし。

二　小學校にての優等生は、無試驗にて中學校に入學を許さる。

三　富士の山の頂上にての最高峯を劔が峰といふ。

四　霞が關のお屋敷を訪ねて、日暮れに家に歸れり。

五　朝來の烈風ます〳〵猛威を加へ、紅塵天地を罩めて行人絶えたり。

○名詞の中、「山」「川」「國民」「談話」等の如く、同類の事物に共通して用ひらるゝものを**普通名詞**といひ、又「日本」「東京」「乃木希典」「日露戰爭」等の如く、同類の中、特に一事物に限りて用ひらるゝものを**固有名詞**といふことあり。

第三章　代名詞

○一　「我は汝と誰を訪はむか」の「我」「汝」「誰」などは、人の名に代へていふ語なり。

二　「それをここよりかなたへ運べ」の「それ」「ここ」「かなた」などは、事物・場所・方角等の名に代へていふ語なり。

右の如く、名詞の代に用ひらるゝ語を**代名詞**といふ。

○代名詞の中には、名詞より轉じたるもの少からず。

君　私　わらは　足下　御邊　先生　小子

拙女　愚老

○代名詞も、また、熟語より成るものあり。

吾-吾　誰-誰　此處-彼處　此方-彼方　汝-たち

我-ら　わらは-ども

これ・それ・かれ・だれ等の代名詞は、略してこ・そ・か・たとのみもいはる。この人　その身　かの件　たが家

◎左の文章中の代名詞を摘出せよ。

一　我は君等の來るを彼處にて待たむ。

二　誰か、こゝに來て、私どもの荷物をあちらへ運びくれよ。

三　そこにある硯と、かしこにある紙とを、こゝに持ちて來よ。

四　彼處に居る人は、何處の何といふ人か。

五　汝は、彼の人と、いつの頃より交はれるか。

六　かなたに見ゆるは、いづれの山脈なるか、こなたに流るゝは、何といふ河ならむ。

七　その說を聞くもの、いづれもかれの博學に驚けり。

○代名詞の中、「我」「汝」「誰」等の如く、人の名に代へて用ひらるゝものを**人代名詞**といひ、又、「それ」「ここ」「かなた」「いづれ」等の如く、事物・場所・方角などの名に代へて用ひらるゝものを**指示代名詞**といふことあり。

第四章　動詞

○一　「旅人が馬車に乘りて行く」の「乘り」「行く」などは、事物の動作を表す語なり。

二　「烟のある所には火あり」の「ある」「あり」などは、事物

の存在を表す語なり。

右の如く、事物の動作・存在を表すに用ひらるゝ語を**動詞**といふ。

○動詞は下の語につゞくるために、その語の末がさまゞに變化するものなり。

書かむ……書きぬ……書く……書けば

落ちむ……落つ……落つる時……落つれば

受けむ……受く……受くる時……受くれば

有らむ……有り……有る時……有れば

右の如く、その語の末の變化するを動詞の**活用**といひ、さて、その變化する部分を**語尾**といひ、その變化せざる部分を**語根**といふ。

語根は又語幹ともいふ。

◎左の文章中の動詞を摘出せよ。

一　風吹かば、花散らむ。

二　山を越え、谷を渡りて、漸くに人家ある所に出づ。

三　雨やみ、空晴れて、日輝き、蝶舞ひ、鳥歌ふ。

四　字を習ひ、畫を描き、また、音樂を修む。

五　彼方の空に聳ゆるは芙蓉峰なり。此方の沖に霞みて見ゆるは大島なり。

○動詞も、また、熟語より成るもの多し。

物語る　身構ふ　飛び立つ　見分く　打ち破る

あざ笑ふ　涙ぐむ　花やぐ　高ぶる　薄らぐ

○動詞は、又、そのまゝいひ据ゑられて、名詞となることあり。

こほり(氷)　かすみ(霞)　ひかり(光)　めぐみ(惠)

をしへ(教)　あそび(遊)

◎左の文章中の動詞を摘出せよ。

一　氷をうち碎きて池中の魚を捕ふるを見る。

二　かなたに目立ちて見ゆる高樓は、何といふ人の住家か。

三　庭の景色も秋めきて、萩の下葉やう〳〵色づきぬ。

四　田舍なれど教育行き屆きて、皆物知りの人のみなり。

五　都を離れたる僻地に住む人ほど、體力勝れたり。

六　古びたる帽子を被り、穢れたる靴をはく。

七　人の過ちを見ては、我が行ひに顧みよ。

第五章　形容詞

○一　「流の早き川は水清し」の「早き」「清し」などは、事物の狀態を形容していふ語なり。

二　「虎は猛く羊はやさし」の「猛く」「やさし」などは、事物の性情を形容していふ語なり。

右の如く、事物の有樣を形容するに用ひらるゝ語を**形容詞**といふ。

○形容詞も、また、動詞の如く下の語につゞくるために、その語の末が變化するものなり。

高くば……高し……高き人……高けれど

善くば……善し……善き人……善けれど
貧しくば……貧し……貧しき人……貧しけれど
惡しくば……惡し……惡しき人……惡しけれど

右の如く、その語の末の變化するを形容詞の活用といひ、さて、その變化する部分を語尾といひ、その變化せざる部分を語根といふこと、なほ、動詞の如し。

◎左の文章中の形容詞を摘出せよ。

一　兎は前足短くして、後足長し。

二　山險しく、水青く、松高く、沙白し。

三　海は無けれども、氣清く、風涼しく、避暑に宜しき處なり。

四　貧しき人と、卑しき人とは、他より侮らるゝこと多し。

五　白き花と、赤き花とは、いづれが美しきか。

○形容詞も、また、熟語より成るもの多し。

口惜し　心憂し　見苦し　聞き苦しづらし　薄暗し
淺黑し　愛らし　女々し　勇ましか弱し

○形容詞には、その語尾が省かれて、名詞となるもの少からず。

あか(赤)　しろ(白)　くろ(黑)　あを(青)

○形容詞が他語と合して一の熟語となる時は、その語尾の省かるゝものなり。

おも(重)み　きよ(清)さ　かなし(悲)げ
とほ(遠)山　うす(薄)色　うれし(嬉)涙

さむ(寒)-がる　わか(若)-やぐ　おも(重)-だつ

面-なが(長)　手-みじか(短)　幅-ひろ(廣)

◎左の文章中より形容詞を摘出せよ。

一　大人しき人は愛せられ、荒々しき人は憎まる。

二　餘りに腹立たしければ、手強く詰責せり。

三　賤しき人の言葉には、聞き苦しき事多し。

四　彼は色淺黑く、細長き顏にて、骨骼逞しき人なり。

五　あたりに人氣もなく、ほの暗き燈の影、物淋しく輝けり。

六　涼しき波風、ま白き帆影、目に入るもの皆清し。

七　叔父は堅苦しき人なれど、叔母は見るからに優しき人なり。

第六章　體言　用言

○名詞は事物の名を表し、代名詞はその代に用ひらるゝ語にて、ともに事物の體を表すものなれば、總稱して之を**體言**といひ、又、動詞は事物の動作・存在等を表し、形容詞はその有樣を形容する語にて、共に事物の用を表す語なれば、總稱して之を**用言**といふ。

○用言は下の語につゞくるために、その語尾の活用するものなること、已に述べたるが如し。

鳴　か　き　く　け　こ

落　た　ち　つ（つ-る　つ-れ）　て　と

五十音圖は目次の次にあり。參照すべし。

流	ら	り	る=る-る る-れ	れ	ろ			
清	さ	し	す	せ	そ	か	き	く	け-れ	こ
烈	さ	し	す	せ	そ	か	しき	しく	しけ-れ	こ

右の如く、用言の中、動詞の方は五十音圖の同行音にのみ活用すれども、形容詞の方は、その加行・佐行に跨りて活用するものなり。

○動詞と形容詞とは、意味の上より別つは勿論なれども、なほ、その活用の形の上よりも區別せらるゝものなり。例へば、左例の如き意味の相對する語にても、その活用の形によりて、一は動詞、一は形容詞とするが如し。

（動　詞）有り　富む　老ゆ

（形容詞）無し　貧し　若し

○「善く」「悪しく」など、形容詞の語尾が「く」に活用し、その下に動詞の「あり」が添はりて、「善く-あり」「悪しく-あり」などあるべきを「く」と「あ」と約りて「か」となり、「善かり」「悪しかり」などいふ熟語を成すことあり。かゝる熟語を**形容動詞**と名づけ、動詞の一種と見なす。

長く-あり……長かり

淺く-あり……淺かり

涼しく-あり……涼しかり

悲しく-あり……悲しかり

◎左の文章中より、動詞・形容詞・形容動詞を摘出せよ。

一　嚴しく取締りたれば、違犯者も少かりき。

二　暑からず寒からず、誠によき氣候なり。

三　昨夜の暴風は强かりしが、損害はさほどにもあらず。

四　苦しみに堪へずば、樂しみも得難からむ。

五　口にいふ事は少くして、身に行ふ事多かれ。

六　善かれ惡しかれ、この恨み晴さでおくべきか。

第七章　助動詞

○一　「母には死なれ、父には捨てらる」の「れ」「らる」などは、

上の動詞に添ひて、その意義を助くる語なり。

二　「人を怨みず、自らを責むべし」の「ず」「べし」なども、上の動詞の意義を助くる語なり。

右の如く、動詞に添ひて、その意義を補ひ助くる語を**助動詞**といふ。但し、助動詞には、稀に名詞・代名詞・形容詞などにも添はるものあり。

東京は日本の首府なり

父は大藏大臣たり

第一の勉强家は彼なり

彼の人は性質は善きなり

○助動詞は、又、他の助動詞の下にも添はるものなり。

教へられたりき

褒められたるなるべし

○助動詞は、動詞・形容詞などの如く活用するものなり。

讀ま　しめむ……しむ……しむる時……しむれば

受け　させむ……さす……さする時……さすれば

聞き　たらむ……たり……たる時……たれば

○今の普通文に專ら用ひらるゝ助動詞を、その表す意義によりて分類し、左に例示すべし。

一　受身の意を表すもの

る　孤兒が人に救はる　風に帽子を取らる

らる　盜賊巡査に捕へらる　妹は母に愛せらる

二　可能の意を表すもの

る　船にても行かる　片足にても歩まる

らる　改めむとすれば改めらる　父母の事のみ思ひ出でらる

●受身の助動詞と、可能の助動詞とは、全く同形にて、兩樣の意義を表すものなれば、よろしく文章の意義に注意して、之を識別すべし。

三　使役の意を表すもの

す　生徒に音樂を習はす　父子供等に手紙を書かす

さす　下婢に塵を捨てさす　弟に算術の難問を考へさす

しむ　母が妹に單衣を縫はしむ　人をして彼にその不心得を諭さしむ

●使役の助動詞は、下に受身の助動詞の「らる」を添へて、「習はせらる」「捨てさせらる」「縫はしめらる」など、他に使役せらるゝ意を表すことあり。

四　崇敬の意を表すもの

る　父上は東京に行かる‖
殿下は御馬に乘らる‖

らる　公爵は書畫を愛玩せらる‖
母上は未明に起き出でらる‖

す　主上都を出で立たす‖
殿下は和歌を好ませらる‖

さす　姫君は琴を彈ぜさす‖
天皇も臨幸せさせ給ふ

しむ　皇太子御位に卽かしめらる‖
皇后も行啓せしめ給ふ

●「す」「さす」「しむ」が崇敬の意を表すに用ひらるゝ時は、その下に「らる」「給ふ」などの語を添ふるを常とす。

●崇敬の助動詞は、可能の助動詞、及び、使役の助動詞と全く同形にして、その意義のみ變れるものなれば、よろしく文章の意義に注意して、之を識別すべし。

五　否定の意を表すもの

ず　花咲かず‖
山の姿も見えず‖

じ　我はしか思はじ‖
徒歩競爭ならば誰にも負けじ‖

六　時を表すもの

つ　心は千々にかき亂れつ‖
計らず友に出で遇ひつ‖

ぬ　櫻も桃も咲き揃ひぬ‖
さめ〴〵と泣き出でぬ‖

たり　夜はしら〴〵と明けたり‖
人々眠に就きたり‖

り　弟と共に學校より歸れり‖
首尾よく試驗に及弟せり‖

き　昔一人の翁ありき‖
少女は泣いて語りき‖

けり　智略に富みけり‖
花も散り果てけり‖

む　午後には風吹き出でむ‖
勉めて止まずば何事も成就せむ‖

七　推量の意を表すもの

‖むはん‖と發音す。從つて‖んとも書く。

けむはけんと發音す。從てけんとも書く。

べし　今の苦は後の樂なるべし　水も流れずば腐るべし

まじ　學問は廢すまじ　忍び難き事もあるまじ

けむ　洋學は何時頃より興りけむ　彼の祖先は何者にてありけむ

●「べし」は、轉じて「道路の左側を行くべし」「明朝九時に出頭すべし」などの如く、命令の意に用ひられ、また、「力山をも拔くべし」「貞女の鑑と云ふべし」などの如く、可能の意に用ひらるゝことあり。

八　指定の意を表すもの

なり　美しき心なり　花の散るなり

たり　父は陸軍大將たり　古今に稀なる賢婦人たり

●指定の助動詞「たり」と、時の助動詞「たり」とは同形なれど、意別なれば、誤り混ずることなかれ。但し、指定の助動詞「たり」は、名詞につき、時の助動詞「たり」は動詞につくものなり。

九　希望の意を表すもの

たし　早く歸りたし　行きて見たし

十　比況の意を表すもの

ごとし　百雷の轟くごとし　光陰は矢のごとし　汽車の走るがごとし　水の清きがごとし

●「ごとし」は、中に「の」又は「が」を挾みて、上の名詞・動詞・形容詞などに接すること多し。

◎左の文章中の助動詞を摘出せよ。

一　怠らず勉强すべし。

二　皇太子殿下には、箱根に御避暑あらせらる。

三　東京に往きたしと思へど、父の許を得らるまじ。

四　父母の教をよく守りて、至孝なりき。

五　眠らむとすれど、眠られず。

六　己自ら率先して實行せば、何事も人に勵行せしめられずといふことはあるまじ。

七　吉田松陰先生の如きは、眞の國士なりといふべし。

八　人に笑はれむが耻かしとて、門を閉ぢさせ、家の奥ふかく隱れ居たるを、遂に見出されけり。

九　知らずとて打ち捨ておくべき事にもあらじとおもはる。

十　物羨みはすまじきものよと、諭されたり。

助詞は又てにをはともいふ。

第八章　助詞

○一　「犬が猫を追ふ」の「が」「を」などは、上の語に添ひて、之を助けて下の語との關係を示す語なり。

二　「肉のみ食ふとも胃を害ふこと無きか」の「のみ」「とも」「か」などは上の語につきて或意義を添へ、他語との關係をいよ〳〵明かにする語なり。

右の如く、上の語に添ひて、之を助けて他語との關係を表す語を**助詞**といふ。

○今の普通文に專ら用ひらるゝ助詞を、その表す意義によりて分類し、左に例示すべし。

一　他語との關係を示すもの

一、他語との關係を示すもの

の　人の家　風の吹く

を　花を折る　人を訪ふ

へ　前へ進め　都へ上る

が　君が代　花が咲く

に　車に乘る　山に登る

より　遠方より來る　雪より白し

つ　天つ神　沖つ波

と　妹と遊ぶ　花雪と散る

から　心から思ふ　口から出づ

まで　頂上まで登る　心まで腐る

●「に」は位置を示す助詞にして、「へ」は方向を示す助詞なり。故に、「前に向く」「馬へ乘る」などいふは誤と知るべし。

二　種々の意義を添ぶるもの

は　朝は寒し　弟には勝る

も　葉も美し　犬にも劣る

のみ　我のみ知る　心にのみおもふ

ばかり　水ばかり呑む　思ふばかりぞ

だに　水だに呑まず　鳥にだにしかず

すら　草木すら情あり　親すら養はれず

さへ　雨降り風さへ吹く　貧さへ加はる

し　折しもあれ　いつしかと待たる

ぞ　君ぞ知るらむ　愼しむべき事ぞ

なむ　花なむ散る　都になむ住む

こそ　年こそ若けれ　人にこそよれ

●「だに」「すら」は、輕きを擧げて重きを言外に思はしむる意の助詞、「さへ」はあるが上に更に添ひ加はる意の助詞なれば、注意して混用せざるやうにすべし。

三　接續の用をなすもの

ば　風吹けば寒し　問はば答へむ

ど　呼べど答へず　品よけれど價高し

ども　見れども見えず　幼けれども力強し

とも　悔ゆとも及ばじ　死すとも怨みなし

て　雨霽れて虹立つ　日暮れて家に歸る

で　行かで歸る　讀まで止む

して　美くして光あり　問はずして知るべし

つつ　見つつ書く　語りつつ笑ふ

が　雨は停みしが風いよ〳〵烈し　終日待ちけるが遂に姿見えず

に　友を訪ねしに不在なりき　日暮れたるに暑さ去らず

を　吾はしか思ふを君はいかに　樂しき世なるを憂しと歎くは愚なり

四　疑問の意を表すもの

や　夜や明けぬらむ　叔父上は家に在りや

か　何をかなげく　何處へ行くか

五　命令の意を表すもの

よ　速に答へよ　よく考へよ

な　勉めて怠るな　罪を犯すな

六　感動の意を表すもの

や　美しき花や　忝き御志なりや

よ　たよりなき心細さよ　元祿の頃かとよ

は　何かはせむ　さる事あらむやは

も　大君はいとも畏し　樂しくもあるかな

な　汝は臆したりな　いとゞ悲しな

かな　盛なるかな　美しき心かな

右に示せるが如く、助詞の中には、同形にして意義の異なるもの多ければ、特に注意して、その意義を混淆することなかれ。

○助詞はいくつも重り合ひて用ひらるゝこと多し。

我には彼よりも重き責任あり

父母の心中をばよく察して見られよや

人にして鳥獸にだにしかざるものあり

右の如く用ひられたる助詞は、それ〴〵の助詞の意義を重ねたるものと知るべし。

○又「に」「と」「を」等の助詞の下に、「て」「して」の添はりて表るゝことあり。

木にて造る

はがきの下に添はる時は、ばとなると知るべし。

困難とてなし

人にして人にあらず

子としてあるまじきことなり

義經をして平氏を討たしむ

右の如く用ひられたる「にて」「とて」「にして」「として」「をして」等は、一の熟合せる助詞と見なすをよしとす。

◎左の文章中の助詞を摘出せよ。

一　君はこれより何處まで行き給ふか。

二　月を見つゝ昔を語らむと思ひて、君をば訪へるなり。

三　我が父と彼の父とは親友にして、我と彼とも亦竹馬の友なり。

四　曇りたるだに寒きを、風さへ加はりて堪ふべくもなし。

五　母の許より、疾く歸れといふ電報ありたれば、明朝一番汽車にて鄉里に歸るべし。

六　隱して見すまじとすとも、遂に顯れでやむべきか。

七　彼をして現代に生れしめば、國家に貢獻せし所も多かりしならむ。

八　惜しいかな、彼は不幸にして短命なりき。

九　兄弟とこそいへ、彼等の性質は雪と炭との如く相違せるぞよ。

十　きみが代は千代に八千代に、さざれ石のいはほとなりて、苔のむすまで。

第九章　副詞

○一　「暫く考へて漸く答ふ」の「暫く」「漸く」などは、下の動詞「考へ」「答ふ」などの意義を限定せる語なり。

二　「山はいよ〳〵高く路はます〳〵險し」の「いよ〳〵」「ます〳〵」などは、下の形容詞「高く」「險し」などの意義を限定せる語なり。

右の如く、動詞・形容詞の意義を限定するに用ひらるゝ語を**副詞**といふ。

○副詞は、又、他の副詞の上に添はりて、その意義を限定することあり。

やや暫く考へ居たり

いと細やかに物語りぬ

右の如く、二の副詞の連る場合には、之を合せて一の副詞と見るもよし。

○副詞は、又、中に他の語を隔てゝ、下の動詞・形容詞の意義を限定することあり。

暫く時の到るを待て

既に夜も更けたり

幸にして虎口を脱せり

○副詞には、本來のものもあれど、名詞・動詞・形容詞、又は、これに助詞の添はりたる熟語より轉じ來れるもの、殊に多し。

一　本來のもの

甚だ（面白し見苦し）　頗る（善し多し）　忽ち（來る消ゆ）　稍や（劣る衰ふ）

只管（思ふ考ふ）　專ら（用ふ修む）　猶（多し有り）

二　他語より轉じ來れるもの

終夜（眠らず語らふ）　餘り（寒し少し）　善く（戰ふ食ふ）　久しく（休む習ふ）

僅に（覺ゆ見ゆ）　極めて（白し惡し）　日々に（生長す高低す）

次第次第に（衰ふ肥ゆ）　巍然として（立つ聳ゆ）　斷然と（辭退す拒絶す）

不幸にして（死す失敗す）

右はその一斑を示せるのみ。他は推して知るべし。

◎左の文章中の副詞を摘出し、且つ、その副詞がいづれの語を限定せるかを説明せよ。

一　なほ尋ぬべきことあれば、暫く待たれよ。

二　風そよ〳〵と吹きて、やう〳〵秋めきたり。

三　屢、彼に訪はるれど、我は未だ彼の家を訪ひたること一度もなし。

四　しほ〳〵と語らるゝを聞き、いよ〳〵あはれを催したり。

五　いかなる片田舎にも、今は必ず學校の設あり。

六　夜も最早明けたるにや、人聲かすかに耳に入る。

七　聊か思ふよしあれば、專ら音樂を修むべし。

八　たゞ物を學ぶのみにて、應用の才なくば、更に學ばざるに劣る。

○「善く」「惡しく」など、副詞として用ひらるゝ形容詞が、下の動詞「あり」に連り約りて、「善かり」「惡しかり」などいはるるものを形容動詞といふこと、前に述べたり。（二十一頁參照）

○「詳細に」「爛漫と」など、「に」又は、「と」にて終る副詞も、また、下の動詞「あり」に連り約りて、「に-あり」「と-あり」が「なり」「たり」となり、「詳細なり」「爛漫たり」などいはるゝことあり。かゝる熟語も、また、**形容動詞**といふ。

鮮明に-あり……鮮明なり

深切に-あり……深切なり

駸々と-あり……駸々たり

憤然と-あり……憤然たり

第十章　接續詞

○一　「山又山」「書を讀み且つ字を習ふ」の「又」「且つ」などは二の語句を接續せしむる語なり。

二　「雨烈しされど風は靜かなり」の「されど」などは、二の文章を接續せしむる語なり。

右の如く、二の語句・文章などを接續するために、その間に挾みて用ひらるゝ語を**接續詞**といふ。

○接續詞の中には、まゝ、上の語句に附屬して表るゝものあり。

御相談申し上げたく候ふ間明朝御來車のほど願ひ上げ候ふ。

不順の時候に候ふ處御機嫌いかゞに候ふや。

○接續詞にも、また、本來のものと、他語より轉じ來れるものとあり。

一　本來のもの

また　且つ　則ち　但し

二　他語より轉じ來れるもの

よりて　故に　隨つて　或は　然れども

さる程に　此に於て

右はその一斑を示せるのみ。他は推して知るべし。

◎左の文章中の接續詞を摘出せよ。

一　霞か。雲か。はた、雪か。

二　明日は、雨、若しくは、雪となるべし。

三　知りて行ひしか。抑も亦、知らずしてか。

四　場内極めて狹し。されば、何人も容易に入場を許されず。

五　弟も行かむ。但し、雨降らば行かじ。

六　深呼吸、或は冷水摩擦を行ひ、且つ運動を盛にすべし。

七　敵は小勢なり。さりながら、侮り難し。

八　不都合少からず候條、自今十分に注意せらるべく候。

第十一章　感動詞

感動詞は又、感歎詞・間投詞などともいふ。

○一「ああ大なるかな」の「ああ」は、心に感動して發する語なり。

二「すは火事よ」「あな悲し」などの「すは」「あな」なども、感動の語なり。

右の如く、心に感動して發する語を**感動詞**といふ。

○文章に多く用ひらるゝ感動詞は、おほむね左の如し。

ああ　あな　あはれ　あはや　あなや

すは　いで　いざ　いでや　いざや

あら　おお

◎左の文章中の感動詞を摘出せよ。

一　嗚呼、盛なるかな。

二　しづかに眠れ、やよ、小供。

三　すは、火事よと、起き出でたり。

四　あはや、海に落ち入らむとす。

五　いざ、諸共に、花見に行かむ。

六　いでや、何ばかりの事かあらむ。

七　おゝ、末怖ろしき少年よ。

第十二章　動詞の語形

○動詞は下の語につゞくるために、その語尾活用して種々

助詞ばを接するとき

用言にくくる時

連用形は「花咲き鳥鳴く」「政亂れ國衰ふ」などの如く、下の文にいひ續くる時にも用ひらる。

の語形に變ずるものなること、已に學びたるがごとし。これ等の語形をその用ひ方によりて、未然形・連用形・終止形・連體形・已然形・命令形と名づく。

一　「雨降らば中止せむ」「死なば苦を忘るべし」の「降ら」「死な」などの如く、助詞「ば」に接して假に定めていふ意を表すに用ふる語形を**未然形**といふ。

二　「花咲き匂ふ」「心亂れやすし」の「咲き」「亂れ」などの如く、下の動詞・形容詞、卽ち、用言につゞくるに用ふる語形を**連用形**といふ。而して、連用形は動詞が轉じて名詞となる語形なり。

三　「水が流る」「霜天に滿つ」の「流る」「滿つ」などの如く、文章をそのまゝ結び止むるに用ふる語形を**終止形**といふ。この語形を動詞の本體とす。

四　「賞を受くる人多し」「雲の靡く彼方を見よ」の「受くる」「靡く」などの如く、下の名詞・代名詞、卽ち、體言につづくるに用ふる語形を**連體形**といふ。

五　「風吹けど雨霽れず」「車を馳すれど追ひつかず」の「吹け」「馳すれ」などの如く、助詞「ど」に接して確と定めていふ意を表すに用ふる語形を**已然形**といふ。

六　「早く行け」「速に答へよ」の「行け」「答へ」などの如く、命令の意を表すに用ふる語形を**命令形**といふ。

○以上述べたる未然形・連用形・終止形・連體形・已然形・命令形の六の語形は、いづれの動詞にもあるものなり。今、左に、二三の例を擧げて之を表示すべし。

	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
書	か	き	く	く	け	け
押	さ	し	す	す	せ	せ
立	た	ち	つ	つ	て	て
問	は	ひ	ふ	ふ	へ	へ
報	い	い	ゆ	ゆる	ゆれ	いよ
懲	り	り	る	るる	るれ	りよ
覺	え	え	ゆ	ゆる	ゆれ	えよ
受	け	け	く	くる	くれ	けよ
(著)	き	き	きる	きる	きれ	きよ
(見)	み	み	みる	みる	みれ	みよ
(射)	い	い	いる	いる	いれ	いよ
(蹴)	け	け	ける	ける	けれ	けよ

終止形と連體形と、又、已然形と命令形と同じきもの

未然形と連用形と命令形と同じきもの

未然形と連用形と命令形と、又、終止形と連體形と同じきもの

	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
(來)	こ	き	く	くる	くれ	こよ
(爲)	せ	し	す	する	すれ	せよ
往	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ねよ
死	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ねよ
有	ら	り	り	る	れ	れよ
居	ら	り	り	る	れ	れよ

未然形と命令形と同じきもの

一も同じき形のなきもの

連用形と終止形と又、已然形と命令形と同じきもの

●表中括弧を附せる動詞は、一音にて成り、語根・語尾を別つこと能はざるものなり。

右の如く、動詞はその語尾の活用まち〳〵なる上に、同一の語形が二三の用を兼ぬるもの多くして、甚だ記憶に便ならず。されば、或動詞の六の語形を知らむとせば、まづ、左の如く「む」「たり」「〇」「時」「ど」「よ」と記しおきて、その動詞

よりこれ等の語にいひつゞけて見るをよしとす。この方法による時は、いかなる動詞も、直にその六の語形を知ることを得べし。

（讀）
よま　む　未然形
よみ　たり　連用形
よむ　○　終止形
よむ　時　連體形
よめど　已然形
よめ　よ　命令形

（見）
み　む　未然形
み　たり　連用形
みる　○　終止形
みる　時　連體形
みれど　已然形
み　よ　命令形

◎左の文章中の動詞が何形の語形に表れ居るかを説明せよ。

一　早く行かば、刻限には間に合はむ。

二　船に乘れど、醉ふことなし。

三　恩を受けば、必ず報いよ。

四　木まづ朽ち果てて、蟲これに生ず。

五　恥づることを知らざるは、自ら身を辱むるものなり。

六　財貨は盡くる事あれど、芳名は朽つることなし。

◎左の動詞の六の語形を擧げよ。

考ふ　榮ゆ　寄す　育つ　衰ふ　分つ　受く
捨つ　煮る　笑ふ　祝ふ　流る　行く

第十三章　動詞の活用

附、動詞の性

○動詞を、その活用の異同により分類して、四段活用・上二段

活用・下二段活用・上一段活用・下一段活用・加行變格活用・佐行變格活用・奈行變格活用・良行變格活用の九種とす。

○一　四段活用

	ア段	イ段	ウ段	エ段	オ段
書	か	き	く	け	(こ)
指	さ	し	す	せ	(そ)

右の如く、語尾が五十音圖中の「ア」「イ」「ウ」「エ」の四段に活用するものを**四段活用**の動詞といふ。

○四段活用の動詞は、終止形と連體形と同じく、又、已然形と命令形と同じきものなり。（五十頁の表參照）

◎左の動詞を活用せしめて、その六の語形を表に作りて見よ。

飽く　走る　言ふ　遊ぶ　歩む　破る　歎く
交る　勇む　進む　祝ふ　誘ふ　勝つ　待つ

○二　上二段活用・下二段活用

	ア段	イ段	ウ段	エ段	オ段
起	(か)	き	く くる くれ	(け)	(こ)

	ア段	イ段	ウ段	エ段	オ段
捨	(た)	(ち)	つ つる つれ	て	(と)

右の前例の如く、語尾が五十音圖中の「イ」「ウ」の二段と、な

ほ、その「ウ」段に「る」「れ」の添はりて活用するものを**上二段活用**の動詞といひ、後例の如く、「ウ」「エ」の二段と、なほ、その「ウ」段に「る」「れ」の添はりて活用するものを**下二段活用**の動詞といふ。これ同じく二段の活用なれども、一は五十音圖中の上方の二段に活用し、一はその下方の二段に活用するを以て、かく區別せるものなり。

○上二段活用・下二段活用の動詞は、未然形と連用形と命令形と同じきものなり。（五十頁の表參照）

◎左の動詞を活用せしめて、その六の語形を表に作りて見よ。

過ぐ　閉づ　忍ぶ　試む　悔ゆ　下る　朽つ

延ぶ　亡ぶ　盡く　用ふ　報ゆ　怖づ

分く　忘る　流る　聳ゆ　留む　治む　交ふ

換ふ　尋ぬ　秀づ　仰す　出づ　與ふ

○三　上一段活用・下一段活用

ア段	イ段	ウ段	エ段	オ段
（見）				
（ま）	み みる みれ	（む）	（め）	（も）

ア段	イ段	ウ段	エ段	オ段
（蹴）				
（か）	（き）	（く）	け ける けれ	（こ）

右の前例の如く、語尾が五十音圖中の「イ」段と、なほ、その

「イ」段に「る」「れ」の添はりて活用するものを**上一段活用**の動詞といひ、後例の如く、「エ」段と、なほ、その「エ」段に「る」「れ」の添はりて活用するものを**下一段活用**の動詞といふ。こも亦、五十音圖中の上方の一段に活用すると、下方の一段に活用するとによりて區別せるものなり。但し、下一段活用の動詞は、右の「蹴る」の一語のみ。

○上一段活用・下一段活用の動詞は、未然形と連用形と命令形と同じく、又、終止形と連體形と同じきものなり。（五十頁の表參照）

◎左の動詞を活用せしめて、その六の語形を表に作りて見よ。

見る　干る　似る　鑄る　顧みる　率ゐる

○四　加行變格活用・佐行變格活用

ア段	イ段	ウ段	エ段	オ段
（來）	（か）き	く＝くる＝くれ	（け）	こ

ア段	イ段	ウ段	エ段	オ段
（爲）	（さ）し	す＝する＝すれ	せ	（そ）

右の前例の如く、語尾が五十音圖中の「イ」「ウ」「オ」の三段と、なほ、その「ウ」段に「る」「れ」の添はりて活用するものは、たゞこの加行の「來」の一語のみにて、後例の如く、「イ」「ウ」

「エ」の三段と、なほ、その「ウ」段に「る」「れ」の添はりて活用するものも、亦、この佐行の「爲」の外に同行の「おはす」の一語あるのみなれば、これ等の少數の動詞を變格の活用として、前者を**加行變格活用**の動詞といひ、後者を**佐行變格活用**の動詞といふ。

○加行變格活用・佐行變格活用の動詞は、未然形と命令形と同じきものなり。（五十一頁の表參照）

○佐行變格活用の本來の動詞は、「す」「おはす」の二語のみなれども、名詞が「す」と合して熟語の動詞となれるものは、すべてこの活用に屬するものなり。即ち左例の如し。

佐	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
罪	せ	し	す	する	すれ	せよ

行變格活用						
論	ぜ	じ	ず	ずる	ずれ	ぜよ
進歩	せ	し	す	する	すれ	せよ
發達	せ	し	す	する	すれ	せよ

○又、左例の如く、「す」の上に副詞の添はれるものも、この活用に屬せる熟語の動詞と見なすも妨なし。

審かにす　明かにす　善くす　辱くす

全うす　潔うす　重んず　甘んず

●「全うす」「潔うす」「重んず」「甘んず」の如きは、もと「全くす」「潔くす」「重くす」「甘くす」といふべきを、發音の便より「く」を「う」「ん」に呼びかへたるものなり、委しくは、後の第二十章に說くべし。

◎左の動詞を活用せしめて、その六の語形を表に作りて見よ。

競爭す　議論す　熟考す　休息す　辯ず　講ず
解す　制す　發す　奴隷視す　田舍化す

○五　奈行變格活用

死ぬといふ動詞は、死な　死に　死ぬ　死ねと、四段活用の動詞としても用ひらる。

ア段	イ段	ウ段	エ段	オ段
死な	に	ぬ=ぬる ぬれ	ね	(の)

右の如く、語尾が五十音圖中の四段と、なほ、その「ウ」段に「る」「れ」の添はりて活用するものは、この奈行の「死ぬ」の外に、同行の「往ぬ」の一語あるのみ。故に、これ等もまた、變格の活用として、**奈行變格活用**の動詞といふ。

居りといふ動詞は、居ら　居り　居る　居れと四段活用の動詞としても用ひらる。

○奈行變格活用の動詞は、その活用に一も同じき語形なきものなり。(五十一頁の表參照)

○六　良行變格活用

ア段	イ段	ウ段	エ段	オ段
有ら	り	る	れ	(ろ)

右の如く、語尾が五十音圖中の四段に活用すること、なほ、四段活用の如くなれども、たゞ、その本體が「イ」段にていひきらるゝものは、この「有り」の外に、同行の「居り」「侍り」の二語あるのみ。故に、これ等も、亦變格の活用として、**良行變格活用**の動詞といふ。

○良行變格活用の動詞は、連用形と終止形と同じく、又、已然形と命令形と同じきものなり。(五十一頁の表參照)

○良行變格活用の本來の動詞は「有り」「居り」「侍り」の三語のみなれど、「有り」が他の品詞と熟合して成れる形容動詞は、すべてこの活用に屬するものなり。卽ち左例の如し。

形容動詞	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
惡し	から	かり	かり	かる	かれ	かれ
美麗	なら	なり	なり	なる	なれ	なれ
爛漫	たら	たり	たり	たる	たれ	たれ

◎左の形容動詞を活用せしめて、その六の語形を表に作りて見よ。

輕妙なり　奇麗なり　長閑なり　巍然たり　斷乎たり

樂しかり　悲しかり　黑かり　清かり

○以上述べたる九類の活用中、上一段・下一段・加行變格・佐行變格・奈行變格・良行變格の六の活用に屬する動詞は、僅に左の數語に過ぎざれば、悉く之を暗記すべし。

上一段活用　著る　煮る　似る　干る　見る（試みる）　鑑みる　惟みる）　射る　鑄る　居る　率ゐる

下一段活用　蹴る

加行變格活用　來

佐行變格活用　爲　おはす（この外、名詞が「爲」と熟合して動詞となれるものは、すべてこの活用に屬すと知るべし。）

奈行變格活用　死ぬ　往ぬ

良行變格活用　有り　居り　侍り（この外、形容動詞は、すべてこの活用に屬すと知るべし。）

●加行變格・佐行變格・奈行變格・良行變格は、略して加變・佐變・奈變・良變ともいふ。

試みるといふ動詞は、試み　試む　試むる　試むれと、上二段活用の動詞としても用ひらる。

用ふといふ動詞は、用ゐ　用ゐる　用ゐれと、上一段活用の動詞としても用ひらる。

○四段・上二段・下二段の三の活用に屬する動詞は、その數も多く、隨つて互に紛れ易し。今、之を識別するには、左の便法によるをよしとす。

一　「書か-む」「讀-ま-む」「習は-む」などの如く、その未然形が「ア」段に活用するものは、四段活用の動詞なり。

二　「落ち-む」「生き-む」「朽ち-む」などの如く、その未然形が「イ」段に活用するものは、上二段活用の動詞なり。

三　「考へ-む」「集め-む」「消え-む」などの如く、その未然形が「エ」段に活用するものは、下二段活用の動詞なり。

◎右の方法によりて、左の動詞の活用を類別せよ。

癒ゆ　籠る　懸く　起く　碎く　亂る　富む

むの代りにずを添へて見るもよし。

照す　流る　呑む　留る　榮ゆ　忍ぶ　戒む

見ゆ　撫づ　語る　恥づ　悔ゆ

○動詞には「光る」「消ゆ」「鳴く」などの如き自動性のものと、「殺す」「破る」「見る」などの如き他動性のものとあり。前者を**自動詞**といひ、後者を**他動詞**といふ。

○同一活用の動詞にても、「水が增す(自動)」「水を增す(他動)」「戸が開く(自動)」「戸を開く(他動)」「風が吹く(自動)」「笛を吹く(他動)」などの如く、場合によりて自動詞とも他動詞ともなるものあり。

○又、同一の語原より出でたる動詞にして、自動・他動の性を表すために、左表の例の如く、その活用を異にするものもあり。

	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形	
沈	ま	み	む	む	め	め	(自動)四段活用
	め	め	む	むる	むれ	めよ	(他動)下二段活用
立	た	ち	つ	つ	て	て	(自動)四段活用
	て	て	つ	つる	つれ	てよ	(他動)下二段活用
移	ら	り	る	る	れ	れ	(自動)四段活用
	さ	し	す	す	せ	せ	(他動)四段活用
枯	れ	れ	る	るる	るれ	れよ	(自動)下二段活用
	さ	し	す	す	せ	せ	(他動)四段活用

◎左の動詞を自動・他動の兩樣に活用せしめて見よ。

碎く　並ぶ　重ぬ　交る　留む　宿る　照る

過ぐ　消す　流る　添ふ　盡く　埋む　亂る

固む　變る

第十四章　形容詞の活用、及び、その語形

○形容詞も、動詞の如く、下の語につゞくるために、その語尾が五十音圖中の加行・佐行に跨りて、「き」「く」「けれ」「し」の四に活用するものなること、已に學びたるが如し。(二十頁參照)これ等の語形をその用ひ方によりて、未然形・連用形・終止形・連體形・已然形と名付け、而して、その終止形を形容詞の本體とすること、なほ、動詞の如し。但し、形容詞には命令形なし。卽ち左表の如し。

語根に「し」を含む形容詞を恒久活の形容詞といひ、他を久活の形容詞といひて兩者を區別することあり。

未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
く	く	し	き	けれ	○
く	く	し	き	けれ	○
く	く	し	き	けれ	○
く	く	(し)	き	けれ	○
く	く	(し)	き	けれ	○
く	く	(し)	き	けれ	○

近　廣　淺　嬉し　美し　惡し

右の表中の「嬉しく」「美しく」「惡しく」などの如く、語根に「し」を含む形容詞の終止形は、語尾の「し」を略して「嬉し」「美し」「惡し」などいふが常なり。但し「嬉しし」「惡しし」などと慣用せらるゝものは之に從ふも妨なしとす。

○形容詞は、未然形と連用形と、その語形同じきものなり。而してその連用形は形容詞が轉じて副詞となる語形なり。

◎左の形容詞を活用せしめて、その五の語形を表に作りて見よ。

樂し　低し　涼し　清し　暗し　羨し　尊し
悲し　苦し　白し　黑し　長し　賤し　貧し
うら若し　いち早し　見にくし　聞き苦し

◎左の文章中の形容詞を摘出し、何形の語形に表れ居るかを說明せよ。

一　この花は珍らしけれど、香少し。
二　古きを溫ねて、新しきを知る。
三　顏は醜しとも、姿の正しきものは美しく見ゆるものなり。
四　貴き人も卑しき人も、同じく日本帝國の臣民なり。
五　風涼しく肌に透りて、いと心地よき夕なり。

六　空清く晴れて日は暖けれど、風未だ寒し。

七　物を惠むには、その嵩の多き少きによるべからず、たゞその志の厚きをよしとす。

八　風なき夕は暑さ殊に甚しく堪へ難し。

第十五章　助動詞の活用、及び、その語形

○助動詞は、主として動詞に添はりてその意義を助くるものなれば、獨立しては表れぬものながら、又、動詞・形容詞などの如く、下の語につゞくるために、種々の活用をなすものなり。隨つて又、動詞・形容詞などの如く、種々の語形を具ふ。

○助動詞の活用には動詞に似たるものあり、形容詞に似たるものあり、或は全く特殊のものあり。その動詞に似たるものは、大方動詞の語形と同じく、又形容詞に似たるものは、形容詞の語形に同じ。されば、助動詞の語形は、すべて動詞・形容詞の語形に準じて知るべし。

一　動詞に似たる活用をなすもの

未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形	
れ（殺さ）	れ	る	るる	るれ	れよ	動詞（四段・奈變・良變）の未然形につく
られ（覺え）	られ	らる	らるる	らるれ	られよ	動詞（上一段・下一段・上二段・下二段・加變・佐變）の未然形につく
せ（讀ま）	せ	す	する	すれ	せよ	動詞（四段・奈變・良變）の未然形につく
させ（受け）	させ	さす	さする	さすれ	させよ	動詞（上一段・下一段・上二段・下二段・加變・佐變）の未然形につく
しめ（問は）	しめ	しむ	しむる	しむれ	しめよ	動詞の未然形につく

受身・可能・崇敬　使役・崇敬

	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形	
時（眺め）	て	て	つ	つる	つれ	(て)よ	動詞の連用形につく
時（鳴き）	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	(ね)	同
時（咲き）	たら	たり	たり	たる	たれ	○	同
時（眠れ）	(ら)	り	り	る	れ	○	動詞（四段・佐變）の命令形につく
時（流れ）	○	○	けり	ける	けれ	○	動詞の連用形につく
指定（良民）	たら	たり	たり	たる	たれ	たれ	名詞・代名詞につく
指定（忠誠）	なら	なり	なり	なる	なれ	なれ	名詞・代名詞及び動詞・形容詞の連體形につく

●表中、括弧内の活用は、殆ど今文には用ひられぬものなりと知るべし。

二　形容詞に似たる活用をなすもの

	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形	
希望（登り）	たく	たく	たし	たき	たけれ	○	動詞の連用形につく

「べし」は動詞の「あり」と連り約りて「べかり」となること多し。
行くべかりき
入るべからず

「ず」は動詞の「あり」と連り約りて「ざり」となること多し。
見ざりき
知らざる人

	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形	
推量（見る）	べく	べく	べし	べき	べけれ	○	動詞の終止形につく但し良變の動詞に限り連體形につく
推量（悟る）	まじく	まじく	まじ	まじき	まじけれ	○	同
比況（動く）	ごとく	ごとく	ごとし	ごとき	○	○	動詞・形容詞の連體形につく

三　特殊の活用をなすもの

	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形	
否定（飲ま）	ず	ず	ず	ぬ	ね	○	動詞の未然形につく
否定（見え）	○	○	じ	じ	じ	○	同
時（散り）	○	○	き	し	しか	○	動詞の連用形につく但し加變・佐變につくに例外あり
時（榮え）	○	○	む	む	め	○	動詞の未然形につく
推量（歸り）	○	○	けむ	けむ	けめ	○	動詞の連用形につく

●「き」の活用「し」「しか」は、加變にては未然形にも連用形にもつけど、

（加變）來（カ）しし（未然）
來（キ）しし（連用）か
（佐變）爲（セ）しし（未然）
爲（シ）き（連用）か

決して「き」は用ひられず、又佐變にては、「き」は連用形に、「し」「しか」はその未然形につくものなり。

◎左の文章中の助動詞を指摘し、その何形の語形に表れ居るかを說け。

一　夜の明けぬ間に家を出でむ。

二　空は曇りたれど、雨は降るまじと思はる。

三　父母の死なれし後は、祖母の手に養育せられたり。

四　民富み國榮えたりしかば、天下平かに治りき。

五　彼が口惜しく思ひつるもことわりならずや。

六　廣告に勉めしかば、漸くに世に流行する事となれりき。

七　飯も食はる、茶も呑まるとて、更に病に注意せられず。

八　繪のごとき絶景、眞に天工の妙を極めたりといふべし。

九　時賴ほどの名君を子に持たれける松下禪尼は、たゞ人にはあらじ。

十　秋來ぬと、目にはさやかに見えねども、風の音にぞ驚かれぬる。

第十六章　注意すべき助動詞・助詞の用法

○吾等は自然に吾が國語の法則を會得し居れば、助動詞・助詞の用法の如きも大方は之を誤ることなけれど、中には古文と今文とその語法の異なるものありて、迷ひ易きものなれば、以下之を說明すべし。

○「らる」が佐變の活用の動詞に添はるには、その未然形をうけて、「罪せらる」「案内せらる」などいふべきを、今文にては、これを約めて、「罪さる」「案内さる」などとも用ひらる。

○「さす」が佐變の活用の動詞に添はるには、その未然形をうけて、「周旋せさす」「案内せさす」などいふべきを、今文にては「せ」を略して、「周旋さす」「案内さす」などとも用ひらる。

○「しむ」が下二段活用の動詞「得」に添はるには、その未然形をうけて「得しむ」といふべきを、今文にては中に「せ」を加へて「得せしむ」とも用ひらる。

○「き」の終止形は「き」なれば、「盛なりき」「衰へざりき」などいふべきを、今文にては、その連體形「し」にていひ切り、「盛なりし」「衰へざりし」などとも用ひらる。

○又、「き」の活用「し」「しか」が四段活用の動詞に添はるには、その連用形をうけて、「殺しし」「過ししか」などいふべきを、今文にてはその已然形をうけて「殺せし」「過せしか」など

とも用ひらる。

○「り」は、四段・佐變の兩活用の動詞の外には續かざる助動詞なれど、今文にては、「異なり」といふ形容動詞に限り、その命令形に「り」を添へて、「異なれり」と用ひらる。

○「ごとし」は形容詞に似たる活用をなす助動詞なれば、「ごとけれ」とも活用すべきやうなれど、さる活用なく、必ず「人の住めるがごとかれど」「似通へるがごとくなれど」など用ひらる。

○「や」は動詞・形容詞の終止形をうけて、「兄弟ありや」「夜も暑しや」などいひ、而して、上に疑の語ある時は、「甲乙いづれを選ぶか」「彼は何處の人なるか」など、必ず「か」を用ひて、「や」を用ひぬが古來の語法なれど、今文にては上に疑の語

の有無に拘らず、その連體形をうけて、「兄弟あるや」「夜も暑きや」「甲乙いづれを選ぶや」「彼は何處の人なるや」など用ひらる。

○「と」は動詞の終止形を受けて、「月出づと見えたり」「事務を執らしむといふ」などいふべきが古來の語法なれど、今文にては、その連體形を受けて、「月出づると見えたり」「事務を執らしむるといふ」など用ひらる。

○「と」は、又、「日本と支那との關係」「墨と雪との差あり」などの如く、體言を重ぬる時は、その各個に添ふべきが古來の語法なれど、今文にては、最終の「と」を省きて、「日本と支那(と)の關係」「墨と雪(と)の差あり」など用ひらる。されど、左例の如く、兩樣の意味に解せられて誤り易きものは、必ずそ

の用法を正しうすべし。

昨日は叔母と伯父(と)の家を訪ねき

この新聞は日曜日と大祭日(と)の翌日は休刊す

○「とも」は動詞の終止形に添はりて、「死ぬとも」「殺さるとも」などいふべきが古來の語法なれど、今文にては、その連體形に添へて、「死ぬるとも滅罪せじ」「殺さるるとも白狀すまじ」など用ひらる。

○「とも」と「ども」とは、今文にては、往々略して「も」とし、左例の如く用ひらるゝこと多し。

終日働くも(働クトモ)厭はじ

數日を經たるも(經タレドモ)歸り來ず

草案は會議に附するも(附スレドモ)之を公表せず

右の「働くも」「經たるも」などの如く、誤解を生ぜざるものは、かく用ふるも妨なけれど、「附するも」の如く、兩樣に解せらるゝものは、その用法を正しうすべし。

◎左の文章中に誤ありや否やを檢せよ。

一　吾は終夜眠らずして考へり。

二　今年何歳にならるや。

三　人夫に荷物を運ばさせて、峠を越えぬ。

四　寒くば着物を重ねて着べし。

五　君は未だ動物園を見まじ。

六　數年を經て歸り來き。

七　たとひ責め殺さるとも、いかで寃罪に伏すべしや。

八　身は千里を隔てりとも心はなどか通じざらむや。

九　私欲を制すことは難く、放逸に流ることは易し。

十　腐敗ししものを食へば、必ず胃を害するべし。

第十七章　中古の助動詞・助詞

○今文には大方用ひられねど、讀本中の中古文などに散見する助動詞・助詞につきて、左にその大要を述ぶべし。

○「らむ」「らし」「めり」「まし」等の助動詞は推量の意を表すに用ひらる。

しづ心なく花の散るらむ（らむ・らめ）

み吉野の山の白雪積るらし（らし）

らむはらんと發音す。從つてらんとも書く。

なむはなんと發音す。從つてなんとも書く。

立田川紅葉亂れて流るめり（めり・める・めれ）
春の心は長閑からまし（ませ・まし・ましか）

○「なむ」「ばや」「がな」等の助詞は、希望の意を表すに用ひらる。

山の端逃げて入れずもあらなむ
心あらむ人に見せばや
さる事はあらずもがな

○「き」「けり」「む」「らむ」「けむ」「べし」等の助動詞は、更に「つ」「ぬ」「たり」「り」等の助動詞に續けて用ひらる。

散り
- てき
- にき
- たりき
- れ……りき

優り
- てけり
- にけり
- たりけり
- れ……りけり

知り
- てむ
- なむ
- たらむ
- れ……らむ

滅び
- てけむ
- にけむ
- たりけむ

咲き
- つらむ
- ぬらむ
- たるらむ
- け……るらむ

枯れ
- つべし
- ぬべし
- たるべし

●「たらむ」「たりき」「たりけむ」等は今文にも常に用ひらる。

○助動詞「つ」の活用「て」及び「ぬ」の活用「ね」等は命令の意を表すに用ひらる。

疾く〳〵歸りてよ
心して往きね

○禁止の意を表す助詞「な」は、これを動詞の上に置き、下に「そ」を添へて、爲なと命ずる意を表すに用ひらる。

幼きものとてな侮りそ

同じみ山の友な忘れそ

第十八章　文語　口語

○吾等が日常の談話に用ふる言語は、文章に用ひ來れる言語と異なるところあり。

水流る……水が流れる

よく勉むる人……よく勉める人

川風涼し……川風が涼しい

美しき花……美しい花

畫を習はす……畫を習はせる

明日より行かむ……明日から行かう

實行せらるまじ……實行されまい

○右の上例の如く、文章に用ふる言語を**文語**といひ、又、下例の如く談話に用ふる言語を**口語**といふ。

○口語にも、廣く一般に亙りて用ひらるゝものと、一地方に限りて用ひらるゝものとあり。その一般に亙るものを**標準語**と稱し、一地方に限らるゝものを**方言**といふ。こゝには、專ら、その標準語の法則につきて說明すべし。

第十九章　口語の動詞の活用　附、動詞の音便

○口語の動詞の活用は、文語の動詞の活用に比して、その種

類少く、僅に、四段活用・上一段活用・下一段活用・加行變格活用・佐行變格活用の五種あるのみ。

○左に、文語と口語との動詞の活用を對比して表示すべし。

但し、表中平假名なるは文語の活用にして、片假名なるは口語の活用なり。

口語	文語	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
四段	四段	讀					
		ま	み	む	む	め	め
		マ	ミ	ム	ム	メ	メ
四段	良變	有					
		ら	り	り	る	れ	れ
		ラ	リ	ル	ル	レ	レ
奈變		死					
		な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
		ナ	ニ	ヌ	ヌ	ネ	ネ

上一段				下一段				加變		佐變	
上一段		上二段		下一段		下二段		加變		佐變	
見		起		蹴		覺		來		爲	
み	み	き	き	け	け	え	え	こ	こ	せ	せ
ミ	ミ	キ	キ	ケ	ケ	エ	エ	コ	キ	セ	シ
みる	みる	くる	くる	ける	ける	える	える	くる	くる	する	する
ミル	ミル	キル	キル	ケル	ケル	エル	エル	クル	クル	スル	スル
みれ	みれ	くれ	くれ	けれ	けれ	えれ	えれ	くれ	くれ	すれ	すれ
ミレ	ミレ	キレ	キレ	ケレ	ケレ	エレ	エレ	クレ	クレ	スレ	スレ
みよ	みよ	きよ	きよ	けよ	けよ	えよ	えよ	こよ	こよ	せよ	せよ
ミョ	ミョ	キョ	キョ	ケョ	ケョ	エョ	エョ	コョ	コョ	セョ	セョ

◎左の口語の動詞を活用せしめて、その六の語形を表に作りて見よ。

見える　吠える　敎へる　與へる　盡きる　居る
勉强する　談ずる　兼ねる　死ぬ　生れる　射る
落ちる　流れる　斬る　助ける　破れる

○口語にて、動詞を下の「た」「て」などにつゞくる場合に、その語尾が發音の便より他の音に呼びかへらるゝことあり。これを動詞の**音便**といふ。かゝる時は、原音の假名を、その呼びかへられたる音に書きかふるものとす。但し、文語の動詞の音便もこれに準じて知るべし。

咲き……咲いた……咲いて

書き……書いた……書いて
買ひ……買うた……買うて……買つた……買つて
笑ひ……笑うた……笑うて……笑つた……笑つて
勝ち……勝つた……勝つて
眠り……眠つた……眠つて
死に……死んだ……死んで
休み……休んだ……休んで
飛び……飛んだ……飛んで

第二十章　口語の形容詞の活用　附、形容詞の音便

○口語の形容詞の活用は、文語にて、その語尾が「き」「し」といふべきは「い」となり、又「く」といふべきは「う」ともなるも

のなり。卽ち、左表の如し。但し、表中、平假名は文語の活用を示し、片假名は口語の活用を示すものなり。

	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形
清	く	く	し	き	けれ
	ク	ク(ウ)	イ	イ	ケレ
涼し	く	く	(し)	き	けれ
	ク	ク(ウ)	イ	イ	ケレ

◎左の口語の形容詞を活用せしめ、その五の語形を表に作りて見よ。

嬉しい　悲しい　苦しい　樂しい　白い　黑い

尊い　固い　軟い　澁い　見憎い　口惜しい

腹立たしい　氣忙しい

○口語の形容詞にては、文語の形容詞の語尾の「き」は「い」に、「く」は「う」にかはること、前述の如くなるが、文語の形容詞も、音便にてその語尾の「き」が「い」に、「く」が「う」に呼びかへらるゝことあり。かゝる形容詞の音便も、またその原音の假名を、呼びかへられたる音に書きかふるものとす。

惜しき……惜しいかな

難き……難いかな

若く……若うして死す

嚴しく……嚴しう諭しぬ

○又、形容詞が佐變の動詞「す」の上に添はりて、副詞として用ひられたるときは、その語尾の「く」が、音便にて「う」若し

くは「ん」となるものなり。（六十一頁參照）

全く-す……全う-す

清く-す……清う-す

重く-す……重ん-ず

輕く-す……輕ん-ず

第二十一章　口語の助動詞の活用

○口語の助動詞は、文語の助動詞に比して、その數も少く、活用のさまも簡單なり。但し口語にのみ用ひらるゝ助動詞もあり。左に重なる助動詞につきて、その活用の異同を表示すべし。表中、平假名は文語の活用を示し、片假名は口語の活用を示すこと、前例の如し。

	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
（殺さ）	れ	れ	る	るる	るれ	れよ
	レ	レ	レル	レル	レレ	レヨ
（覺え）	られ	られ	らる	らるる	らるれ	られよ
	ラレ	ラレ	ラレル	ラレル	ラレレ	ラレヨ
（書か）	せ	せ	す	する	すれ	せよ
	セ	セ	セル	セル	セレ	セヨ
（見）	させ	させ	さす	さする	さすれ	させよ
	サセ	サセ	サセル	サセル	サセレ	サセヨ
（戰う）	たら	たり	たり	たる	たれ	○
	タラ	タリ	タ	タ	タレ	○
（讀ま）	○	○	む	む	め	○
（尋ね）	○	○	ウ（ヨウ）	○	○	○

(聞き)	たく	たく	たし	たき	たけれ	○
	○	タク(タウ)	タイ	タイ	タケレ	○
(言ふ)	まじく	まじく	まじ	まじき	まじけれ	○
	○	○	マイ	○	○	○
(降る)	○	ラシク(ラシウ)	ラシイ	ラシイ	○	○
(親友)	たら	たり	たり	たる	たれ	○
	ダラ	ダツ	ダ	○	○	○
(飲ま)	ず	ず	ず	ぬ	ね	○
	ズ	ズ	ヌ(ン)	ヌ(ン)	ネ	○
	ナク	ナイ	ナイ	ナイ	ナケレ	○

◎左の口語を文語に改めよ。

一　猿も木から落ちることがある。

二　朝早く起きるは、何よりも藥である。

三　賤しい言葉を用ひれば、笑はれるぞ。

四　そこに見える花は、何といふ花であらうか。

五　七に三を加へる時は十になる。

六　怨みに報いるに、德を以てするといふ事もある。

七　猥りに塵芥を捨てることを禁じられた。

八　才と學と德とを兼ねた人は少いものである。

九　生きるも死ぬも、共に天命とあきらめる外はない。

十　財貨は盡きるが、芳名は朽ちない。

第二十二章　口語の助詞

○口語の助詞は文語と異ならざるもの多し。されば茲には口語と文語と相異なるもののみを對照して表示すべし。但し平假名は文語を示し、片假名は口語を示すものなり。

文語	口語	例
に	へ	學校に泊る……學校へ泊ル 此處に置く……此處へ置ク
より	カラ	東京より歸る……東京カラ歸ル 口より吐き出す……口カラ吐キ出スー
のみ	バカリ	家にのみ居る……家ニバカリ居ル 氣のみ急がる……氣バカリ急ガレル
だに	デモ	水だに呑まれず……水デモ呑マレナイ 立錐の地だになし……立錐ノ地デモナイ

すら	サヘ	本人すら知らず……本人サヘ知ラナイ 鳥獸すら恩を知る……鳥獸サヘ恩ヲ知ッテ居ル
さへ	マデ	風さへ吹き出でぬ……風マデガ吹キ出シタ 家さへ失ひぬ……家マデモ失ッタ
とも	テモ（デモ）	泣くとも許されじ……泣イテモ許サレマイ 死すとも忘るまじ……死ンデモ忘レマイ
ども	ケレドモ	呼べど答へず……呼ブケレドモ答ヘナイ 見れども見えず……見ルケレドモ見エナイ
にて	デ	病氣にて休む……病氣デ休ム 誰にても爲らる……誰デモデキル
して にして	テ（ッテ） デ	細くして大なり……細クテ大キイ（細クッテ） 堅牢にして廉價なり……堅牢デ廉價ダ
で	ナイデ ズニ	書を讀まで眠る……書ヲ讀マナイデ眠ル 學校に行かで歸れり……學校ヘ行カズニ歸ッタ
つつ	ナガラ	見返りつつ行く……見返リナガラ行ク 歩きつつ談る……歩キナガラ談ル

に を	ノニ	冬來れるに綿入なし……冬ガ來タノニ綿入ガナイ 雨降るを傘さゝで行く……雨ガ降ルノニ傘ヲサゝナイデ行ク
や	カ	花は咲けりや……花ハ咲イタカ 兄弟ありや……兄弟ガアルカ
よ	ロ イ	考へて見よ……考ヘテ見ロ 此方へ來よ……此方ヘ來イ

◎左の口語を、文語に改めよ。

一　雨が降つたのに、途はもうかわいて居る。

二　先月から眼病で、何事もすることが出來ない。

三　鐵砲は何時の頃から吾が國に傳はつたものであらうか。

四　名譽ばかりは金錢でも買はれないものだ。

五　屢〻訓誡するけれども、一向に改心しない。

六　話に聞いてさへ身の毛がよだつ。

七　用意は整うたのに、船が出ない。

八　いくら考へても、名案もあるまい。

九　問はないで知れることだ。

十　寒くつてもしばらく忍耐しろ。

十一　悔んでもかひないことと知りながらも、あきらめられない。

十二　獨で旅行する時は淋しいばかりで、面白いことは少しもない。

文章篇

第一章　主語・客語・述語

○種々の單語をつゞり合せて、完結せる思想を文字にて表せるものを**文章**といふ。

鳥　啼く
百花　咲き亂る
風　烈し
身體　か弱し

○右の「鳥」「百花」「風」「身體」などの如く、その文章の主體となる語を**主語**といひ、「啼く」「咲き亂る」「烈し」「か弱し」などの如く、その主語の動作・有樣などを叙述する語を**述語**といふ。

述語は、又、說明語ともいふ。

○主語は體言より成り、單獨に表るゝか、さらずば、下に他語との關係を表す助詞の添ひて表るゝものなり。

風　吹く
月　清し
猫が　眠る
朝は　寒し

○述語は用言より成り、更に助動詞・助詞等の添はりて、その意味を完全ならしむるものなり。

夕風　涼し
迅雷　轟く

日も　暮れたり
我は　眠られず
過失　無かりしか

○述語は、又、體言、若しくは、用言に「なり」「たり」「ごとし」等の助動詞の連りたる語より成ることあり。

孔子は　聖人なり
月光の　漏るるなり
父は　船長たり
怒濤　山のごとし
風景　描くがごとし

下の例の如き場合の「なり」「たり」「ごとし」等を述語とし、又「聖人」「船長」「山の」等を補語と稱する説もあり。

○以上述べたるが如く、主語は文章の主題にして、述語はその動作・有様を述ぶるものにて、いづれも文章の主要語なれば、いかなる文章にても、必ず主語と述語とを要するものと知るべし。

○又、主語と述語とを具へたる文章が、更に或主題の述語として用ひらるゝことあり。

象は　體—大なり
雪は　色—白し
彼は　見聞—淺からず

○右の「象」「雪」「彼」などの如きは、全文の主語とも見るべきものなれば、之を**文主**といふ。

○文章の述語の意義によりては、その叙述を完全ならしむるために、更に他の語を補ふを要す。

犬が　猫を　追ふ

猿は　人に　近し
氷が　水と　なれり

○右の「猫」「人」「水」などは、下の述語の意義を補ふために用ひられたる客體の語なれば、之を**客語**といふ。

○又、述語の意義によりて、二の客語を要することあり。

父が　財産を　子に　讓る
賊が　岩穴を　住家と　爲す
教師が　生徒に　音樂を　習はす

下に助詞「を」の添はる客語のみを客語とし、「に」「と」などの添はる客語を別に補語と稱して、之を區別する説もあり。

○以上例示せるが如く、客語は、主語と同じく體言より成り、而して、その下に助詞「を」「に」「と」などを要するものなり。

○客語も、亦主語・述語などと同じく、闕くべからざる文章の主要語なりと知るべし。

第二章　修飾語

○主語・客語・述語等は、種々の語によりて、その意義を形容修飾せらる。

涼しき　風　吹く
外人　日本の　風土を　賞す
光陰は　流るる　水に　似たり
雨　烈しく　降りき

○右の「涼しき」「日本の」「流るる」「烈しく」などの如く、文章の主要語を形容修飾する語を**修飾語**といふ。

○主語・客語として用ひらるゝ體言の修飾語は、形容詞、若しくは、之に準ずべき語より成り、又、述語として用ひらるゝ

用言の修飾語は、副詞、若しくは、之に準ずべき語より成る。

流るる　水は　清し

吾が　妹は　美しき　肩掛を　持てり

荒廢せる　城址は　狐狸の　住家と　なれり

風雨　ます〳〵　烈し

迅雷　殷々として　轟きわたる

家庭に於ける　辛勞は　少しも　無し

不幸なる　彼は　病を以て　夭折せり

○右の「流るる」「美しき」「荒廢せる」などの如く、動詞・形容詞などの連體形が修飾語として用ひらるゝ時は、その修飾語に更に主語・客語の添はることあり。

月――清き　夜は　稀なり

鹿を――追ふ　獵師は　山を　見ず

虎に――似たる　動物は　猫なり

○修飾語として用ひらるゝ動詞・形容詞などの連體形は、下の體言が省略せられたる場合には、直に主語・客語と見なさるゝものなり。

知る(人)は　稀なり

弟は　行く(こと)を　欲せず

老いたる(もの)は　若き(人)に　扶けらる

○修飾語は更に他の修飾語によりて修飾せらるゝものにして、かくして、文章は次第に長くなり行くなり。

清く涼しき風　そよ〳〵と海上より吹き來る

伯父の家の子供が　美しく書ける油畫を　持てり

青々と茂れる木影　清き池の水に　映れり

◎左の文章中の主語・客語・述語・修飾語を區別せよ。

一　仁者は山を樂しむ。

二　我が國は世界無比の帝國なり。

三　田舍の人が、人造金を眞の黃金と見誤る。

四　我は懇切なる叔父の保護を受く。

五　怪しき人影、彼方の物陰に見えたり。

六　小さき犬が、大なる兎を捕へたり。

七　活潑なる精神は、健全なる身體に宿る。

八　我が家は祖父の代より主君の殊遇を蒙れり。

主語＋修飾語＝主部
客語＋修＝客部
述語＋修＝述部
文主＋修＝文主部

第三章　主部・客部・述部・文主部

○文章の主語と之に屬する修飾語とを合せて**主部**と稱し、客語と之に屬する修飾語とを合せて**客部**と稱し、述語と之に屬する修飾語とを合せて**述部**と稱し、文主と之に屬する修飾語とを合せて**文主部**と稱す。

庭前の遣水の邊の小萩が（客部）　咲き初めたり（述部）

浦島太郎は（客部）　子供に打たるる龜を（客部）　助けたり（述部）

我は（文主部）　やさしく懇なる（述部）一人の叔母に（客部）　育てらる（述部）

蓮の花（文主部）　いかにも清く（主部）美しく（述部）　咲きたり（述部）

舶來の品（主部）は　その價（客部）　和製のもの（述部）よりも高し（述部）

黑き犬が（主部）　肉もなき魚骨を（客部）　しきりに嚙み食ふ（述部）

○主語・客語・述語は、いくつも重りて一文章中に表るゝことあり。これ等も、總括して一の主部・客部・述部と見なすべし。

梅も櫻も桃も（主部）　一時に咲き出づ（述部）

我等は　筆と紙と墨とを（客部）　買ひ求めたり

父が　太郎・次郎・三郎に（述部）　財産を　分與せり

奢侈は（主部）　恐るべく・戒むべし（述部）

我と彼とは（客部）　同じ年に生れ・同じ學校に（客部）通へり

兄は　國語及び漢文をば（客部）　父と・伯父とに（客部）學べり

○以上述べたる、主部・客部・述部・文主部も、一の主語・客語・述語・文主と見なして取扱はるべきものなり。

◎左の文章を主部・客部・述部に分て、

一　人の少き家は、至つて寂しきものなり。

二　隣家の子供が、畫を書きたる本を澤山に持てり。

三　精確なる知識は、鋭利なる器械のごとし。

四　頼朝、景季と高綱とに名馬を賜ふ。

五　露西亞と支那と日本とは、相隣する國なり。

六　正成は智・仁・勇を兼備せる大將なりき。

七　我等が育てられたる伯父の家は、彼方の森陰に見ゆ。

八　伯父は生臭き肉類と燒きたる豆腐とを食はず。

第四章　主語・客語・述語・修飾語の倒置、及びその省略

○一の文章中にて、主語は上位にあり、述語は下位にあり、客語はその中間にあり、而して、修飾語はその修飾すべき語の上にあるべきが常なれど、これらのうちにて、特に主眼とする語を首位におきて注意を促さむために、その位置を顚倒せしむることあり。

東郷大將を　君は　□　知れりや

木の枝に　凧が　□　懸る

あはれなり　霞に消ゆる船の影　□

昨夜　吾等は　東京を　□　出發せり

○右の如く、主語は文章の首位にあるべきものなれども、他語の倒置によりて、却てその下位に表るゝこと多し。また、

修飾語は述語の修飾語に限りて倒置せらるゝものなり。

○主語・客語・述語等の文章の主要語も、その語を省きても文意の通ずる時は、之を省略することあり。

(誰も)この土手に登るべからず

高山には雪多く平地には(雪)少し

我等は(其の事を)少しも知らざりき

人は(我を)譏るとも我は(人を)恨みじ

弟も入學を(學校長に)許されたり

人々舟に乘りたれば我も(舟に)乘りぬ

彼は末恐るへき少年にこそ(ありけれ)

北部は麥を(產し)南方は茶を產す

○右は文章の主要語の省略せられたる例なれど、なほ、主要

語に添はれる助動詞・助詞などの省略せらるゝことも少からず。

父は煙草(を)は呑まず

人々夏(に)は麻布を着る

勉強は幸福の母(なり)

彼は何人(なる)ぞ

(吾が)天の原(を)ふりさけ(て)見れば(かの月は)春日なる三笠の山に出でし月(なる)かも

露の(ごとき)命(が)惜しと(いふ)にはあらねど、(吾は)ただ徒に(死せむ)やはと思ふにこそ(ありけれ)

○かくの如く、文章の省略せらるゝは、その語を省きても文意の明かなる時、殊に文章を簡明ならしめむとして行はるゝものなり。

◎左の文章につきて省略せられたる語を補ひ、倒置せられたる語を正位に復して見よ。

一　我を誰と思ふか。

二　これより内、猥に入るべからず。

三　多く財を有する人は、少しく散じて貧民を救へ。

四　我聞く、臺灣は惡疫流行すと。

五　千里の道も一歩より。

六　油斷大敵。

七　門前にて、われ等は待たむ。

八　雲のいづこに月宿るらむ。

九　煙草も酒も子女は呑むべからず。

十　低きに居りて高きを望むは、世人の常か。

第五章　句

○前章にも例示せるが如く、一の文章が他の修飾語となりて表るゝことあり。

月清き　夜は　稀なり

子供が　肩先の破れたる　着物を　着る

彼は　意志堅固なる　人と　思はる

故郷の　兩親も　花咲かば　上京せむ

○右の「月清き」「肩先の破れたる」「意志堅固なる」「花咲かば」などの如く、一の文章がその獨立を失ひて、修飾語として用ひられ、文章の一部分を成せるものを**句**といふ。

人少き　家は　寂し

子供等は　父の歸る　日を　指折りて　待つ

華やかなりし邊も　人住まぬ　野らと　なる

○右の「人少き」「父の歸る」「人住まぬ」などは、下の體言を修飾するものなれば之を**形容詞的句**といふ。

勇士は　力盡くとも　屈せず

風吹けば　木の葉　散る

日は暮れたるに　宿るべき家なし

古人も　邪は正に勝たずと　いはれたり

○右の「力盡くとも」「風吹けば」「日は暮れたるに」「邪は正に

勝たずと」などは、下の用言を修飾するものなれば、之を**副詞的句**といふ。

●接續の助詞ばどど〻ともがをにてでしてつつ等は副詞的句に添はるものなり。

親の子を愛するは　眞情なり

人々　彼が死せるを　悲しむ

點々たる　漁火は　星のきらめくに　似たり

○右の「親の子を愛する」「彼が死せる」「星のきらめく」などは、下にあるべき體言に添はる形容詞的句なれど、下の體言が省略せられて、名詞と同一の用をなすものなれば、之を**名詞的句**といふ。

夏は暖く　冬は寒し

副詞的句に添はるばは、風吹かば木の葉散らむ　風吹けば木の葉散る　運よくば勝つべし　運よければ勝つ

などの如く、動詞・形容詞の未然形と已然形とたうく。その未然形たうくる時は假定の條件を示し、已然形をうくる時は確定の條件を示して、その條件に相應する意を下に表すものなり。

姉は音樂を好み　弟は繪畫を嗜めり

顔は青ざめ　手足は冷え　息もたえ〳〵なり

○右の「夏は暖く」「姉は音樂を好み」「顔は青ざめ」「手足は冷え」などは下の文章と相重りて表るゝまでにて、いづれも獨立したる意義を有するものなれば、これを**獨立句**といふ。

◎左の文章中の形容詞的句・副詞的句・名詞的句・獨立句を指摘せよ。

一　若き人は麗しけれど、老いたるは見苦し。

二　波の起るは、風の吹くによる。

三　水清ければ、大魚棲まず。

四　光陰の速なるは、水の流るゝに似たり。

五　風は少しも吹かで、雨のみ頻に降る。
六　怠るものは必ず負け、勉むるものは必ず勝つ。
七　髪は亂れ、衣は破れ、顏色やつれたり。
八　暴風土砂を飛ばし、泥濘塗を沒す。

第六章　文章の構造上の種類

○文章はその構造の上より區別して單文・複文・重文の三種とす。

一、單文

○一の主語と、一の述語とにて、單一なる叙述をなす文章を單文といふ。

(主語)　(述語)
風　涼し
人が　走る
百花　爛漫たり
雨が　降りたり

○述語の意義によりて、客語の添はれるものも、一の單文なり。

(主語)　(客語)　(述語)
暴風　家を　倒す
子供が　畫を　習ふ
猿は　人に　近し
城址が　畠と　變りぬ

（主語）　（客語）　（客語）　（述語）

賊が　岩穴を　住家と　なす

父が　財産を　長男に　讓りたり

○又、主部・客部・述部より成れるものも、主語と述語との關係は單一なれば、なほ、單文なり。

烈しき風（主部）　堅牢なる家を（客部）　悉く倒壞せり（述部）

吾が兄弟は（主部）　一人の叔母に（客部）　幼少より育てらる（述部）

我と彼とは（主語）　同じ年に生れ（述部）　同じ學校に通へり（客部）

兄は（主語）　國語及び漢文をば（客部）　父と伯父とに（述語）　學べり

二、複文

○一の文章の中に形容詞的句・副詞的句・名詞的句等の句の含まれたる文章を**複文**といふ。

「兎は前足短し」「外海は波荒る」など文主を有する文にては、「前足短し」「波荒る」等の文は、上の文主に對して述語の地位に立つものなれば此等も亦單文とすべし。

雪降る夜は靜かなり

伯父が黑き門ある家を建てたり

風は烈しく吹けども雨は少しも降らず

人々暴風雨の兆ありとて戰き騷ぐ

月日の速に過ぎ行くは恰も水の奔流するに似たり

○複文は、又、他の文章中に含まれて表るゝことあり。

臣君を諫むる事は國家のためなれば憚る所なし

所願成就して目的達したる時は筆舌に盡し難き愉快あり

慈愛深き母は弟の死を聞きて泣き悲しむ事甚し

○右の如く、複文が句となりて一文章の中に表るゝものも、また、複文なり。

三、重文

○獨立句が下の文章と相重りて、一の文章をなせるものを**重文**といふ。

髪は黑く肌は白く眼は涼し

豹は死して皮を留め人は死して名を留む

怠る者は必ず負くべく勉むる者は必ず勝つべし

○右の如く、重文中の獨立句はその述語たる動詞・形容詞、及び、之に添はる助動詞の連用形を以て、下につゞくるものなり。

○若し又、重文中の獨立句の述語が形容動詞なる時は、「あり」に連らぬ原の形に表るゝものなり。

月明かに　星稀なり

日は麗かに　風暖かなり

風穏かに　波立たず

○又、重文にては、最末の述語の時が、上の各獨立句の時を代表するものなり。

雨烈しく降り（現在・降る）風いよ〳〵吹く（現在）

父は三年前に死し（過去・死したり）母は去年の秋死したり（過去）

明日は算術を復習し（未來・復習せむ）明後日は理科を復習せむ（未來）

○以上、單文・複文・重文の大要を述べたれども、なほ、複文が重文中に含まるゝものあり。又、重文が複文中に含まるゝも

のあり。

花咲く春は樂しく月澄む秋は哀なり

風の吹かぬ日は暖く雨の降る日は涼しかりき

日出づれば空晴れ日沒すれば空曇る

○右の如く複文が重りて重文を形成するものも、また、重文なり。

花咲き鳥啼く春は來りぬ

紙は色白く質强く光澤あるをよしとす

日暮れ風加はれども暑氣更に減ぜず

○右の如く、重文が句となりて複文を形成するものも、また、複文なり。

○吾等が日常讀みもし、書きもする所の文章は、かくの如くにして、單文・複文・重文、相混淆して、複雜なる文章をなすものなり。

◎左の文章は單文・複文・重文のいづれに屬するか。

一　能ある鷹は爪をかくす。

二　よく勉强する人は、後に必ず令名を揚ぐべし。

三　吾が軍の向ふ所、草木も悉く風靡す。

四　雨風烈しく、道は暗く、吾等は進退に窮せり。

五　水は方圓の器に從ひ、人は善惡の友による。

六　身は千里を隔てたりとも、心はなどか通せざらむや。

七　兄の持てるは大きく、妹の持てるは小さし。

八　我は餓死すとも、人に食を乞ふこと能はず。

第七章　文章の性質上の種類

○文章をその性質の上より區別して平叙體・疑問體・命令體・感動體の四種とす。

一、平叙體

○事實をありのまゝに叙述する文章を**平叙體**の文といふ。

梅の花咲く
霜は軍營に滿ちて秋氣淸し
日本は東洋第一の强國なり
なす事もなく徒に月日を過しけり

○右の如く、平叙體の文はその述語を動詞・形容詞・助動詞の終止形にて結ぶものなり。されど、上に「ぞ」「なむ」の助詞ある時は、連體形にて結び、「こそ」の助詞ある時は已然形にて結ぶものなり。かゝる「ぞ」「なむ」「こそ」等の助詞を係といひ、下の結に對して之を**係結**といふ。

松の木の間に人影ぞ見ゆる
久しく京になむ住みける
目には見えねど香こそ著るけれ

○然れども、「ぞ」「なむ」「こそ」の係が、一文章に含まるゝ句中にある時には、その結を轉じて、直に下に續くるものなり。

雪かとぞよそには見れど梅の花、折りては似たる色なかりけり
年比よく具しつる人々なむ別れ難くおもひて頻に

とかくしつつののしる

合戰の道をば武士にこそ任せらるべきに道にもあらぬ御計いかがあるべき

○又、「と」「とて」「など」等の助詞にてうけたる挿入文も、一の文章中の句となれども、もと、挿入文は獨立せる文章なれば、その係結を正しくすべきものと知るべし。

「物のあはれは秋こそまされ」と古人もいへり

「花ぞ昔の香に匂ひける」などいふ歌あり

二、疑問體

○叙述に疑ふ意を表す文章を疑問體の文といふ。

君は兄弟ありや

叔母の病氣は餘程重きか

甲乙いづれをよしと定むべきか

○右の如く、疑問體の文は平叙體の文の下に、疑問の意を表す助詞「や」又は、「か」を添へて結ぶものなり。

●「や」は動詞・形容詞、及び、これに添はれる助動詞の終止形につき、「か」はその連體形につき、而して、上に疑問の語ある時は、必ず下に「か」を用ふべきが古來の語法なれど、今文にては、上に疑問の語の有ると無きとに拘らず、「や」も「か」も、共に連體形に添へて用ひらるゝに至れり。（七十九頁參照）

○上に疑問の語ある時は、疑問の意明かなるを以て、下に添ふべき「か」を省略することあり。

夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいづこに月

宿るらむ(か)
夏草はしげりにけれど時鳥など吾が宿に一聲もせぬ(か)

○右の如く、下に添はるべき「か」の省かれたる場合に、助詞「ぞ」を添ふることあり。

汝の名は何といふ(か)ぞ
生れたる所はいづこなる(か)ぞ

○又、「や」「か」が文章中にありて係となる時は、「ぞ」「なむ」の係と同じき用法にて、卽ちその文章の終にある動詞・形容詞・助動詞の連體形にて結ぶものなり。

默々として何事をか考ふる
釋迦と孔子といづれか尊き

今は狐狸などの住家とやなりぬる

○疑問體の文は、又、疑ふ意の變じて確むる意となることあり。之を**反語**といふ。

我いかでか人に劣らむ(劣リハセジ)
月日は人を待つものかは(待ツモノニアラズ)
豈徒に一生を終へむや(終ヘハセジ)

三、命令體

○叙述に命令の意を表す文章を**命令體**の文といふ。

汝は急ぎて行け
あつばれの戰士たれ
汝の繪草紙を彼に與へよ
彼にも其を見せられよ

油斷して負くることなかれ

ゆめ〳〵父母の恩を忘るな

兜の天邊を射さすな

○右の如く、命令體の文の中、せよと命ずるものは、動詞、及び、之に添はれる助動詞の命令形、若しくは、之に助詞「よ」を添へたる述語にて結び、すなと命ずるものは「なかれ」といふ形容動詞の命令形、または、動詞、及び、之に添はれる助動詞の終止形に「な」を添へたる述語にて結ぶものなり。

○又、動詞、及び、之に添はれる助動詞の終止形に、推量の助動詞「べし」を添へたる述語にて結び、命令の意を表すことあり。但し、すなと命ずる時は「べからず」といふ。

早く行くべし

汝は毎日英語を復習すべし

道路の左側を通行せらるべし

輕々しく干渉すべからず

この花折るべからず

缺席せしむべからず

四、感動體

○叙述に感動の意を表す文章を感動體の文といふ。

御父君もいとど衰へたまひたるよな

脆きは人の心なるかな

花の色はうつりにけりな

そはいと忝しや

夜はいたくふけぬるよ

○右の如く、感動體の文は、多くその述語に感動の意を表す助動詞を添へて表すものなり。

○感動體の文は、又、感動詞を伴ふこと多し。

聖人の德あはれ大なるかな

ああ今年も徒に過ぎにけりな

○感動詞は文章外に獨立する語なれど、かくの如き場合には、ひきくるめて一の感動體の文と見なすべし。

◎左の文章は平叙體・疑問體・命令體・感動體のいづれに屬するか。

一　己の欲せざる所は人に施すことなかれ。

二　人も學びて後にこそ、誠の道はあらはるれ。

三　七たび尋ねて人を疑へ。

四　願はくは花の下にて死なむかな。

五　豹は死して皮を留め、人は死して名を留む。

六　いづれの日か、この苦痛を免かるべき。

七　輕々しき振舞を爲すべからず。

八　あはれ、今年も暮れにけるかな。

九　火を睹るより明かなる理ならずや。

十　無益の殺生は慎むべきことにこそ。

改訂實用日本文典終

大正三年十一月十八日改訂再版印刷
大正三年十一月二十三日改訂再版發行
大正七年八月二十一日修正印刷
大正七年八月二十六日修正發行
大正七年十二月二日修正再版印刷
大正七年十二月五日修正再版發行

改訂實用日本文典

定價金參拾七錢

大正十二年度臨時定價金六拾參錢

六拾七錢

不許複製

編纂者　明治書院編輯部

發行者　東京市神田區錦町一丁目十番地
株式會社明治書院
取締役社長　三樹一平

印刷者　東京市本所區番場町四番地
守岡功

發行所　東京市神田區錦町一丁目
（長電話神田二三九八番）
株式會社明治書院
（振替貯金口座東京四九九一番）

（凸版印刷株式會社本所分工場印刷）

庫
18
361
広島大学図書
2000041361